

英語で日本を紹介できますか？

東京・府中市立府中第一小学校で、「親子で楽しむこども英語塾」著者ミサコ・ロックス!さん体験授業



アメリカで中学校の美術教師を経てマンガ家に

小学校5、6年生を対象に英語の必修化が始まった。同小学校では、例年アメリカンスクールとの交流も行われ、国際人としての高い意識教育が行われている。これからの社会は、国際化の一途をたどることは間違いないようだ。

小島茂校長は「目標は小学校で英語が読めるようになること」と英語に対する想いも熱い。

この日、5年1組にアメリカからやって来たのは、「親子で楽しむ こども英語塾」(明治書院刊)の著者でマンガ家でもあるミサコ・ロックス!さん。まずは英語入門、日本の子どもたちに英語で楽しいコミュニケーションを体験してもらおうというものだ。

出会いは挨拶から始めよう。

「私はニューヨークからやって来ました。My name is Misako Rocks!」と大きな声が教室に響きわたる。その声に引き寄せられるようにミサコさんを見詰める子どもたち。

アメリカでマンガ家として活躍、子どもたちにマンガや日本の文化の魅力を伝えているミサコさんは、子

どもとの会話のキャッチボールが得意だ。

アメリカの子どもたちは自己を表現するのが上手。自分の意見や伝えたいこと

アイデンティティをきちんと持って、何かを尋ねると一斉に手を上げて発言しようとする。それに比べ日本の子どもたちはシャイで、自信を持って発言できる子が少ないようだ。

「アメリカの子どもたちはみんな元気だから、日本の元気にも負けないぐらいな？」とミサコさん。「ハイ」と、次々に手を上げる子どもたち。大きな声が教室に響き渡る。

「ワンピース、ドラゴンボール、ナルト」。顔を輝かせながら答える。マンガ好きの子どもたちの顔はほころんだままだ。

場も和んだところで、さあ、授業。テキストになるのはミサコさんの著書。

本書には、ひなまつり、七夕、お正月など春夏秋冬の日本の伝統行事が英語と日本語で解説されている。同時に、海外、主に欧米の文化についても、日本と比較しながら紹介、自分の身近なことに照らし合わせ海外の文化を考察することがで



みんなの前で発音できたら「ハイ・ファイブ!」

きるというものだ。

海外の人々は自分たちの国の文化に誇りを持っていて、その上で相手の文化も知ろうとする。それがまずは国際人としての第一歩で、とても重要なことなのだ、という。

会話の噴き出しの部分には英語と日本語があり、解り易い。行事の解説のページには可愛いイラストがふんだんに盛り込まれて、マンガ家の著書ならではの、楽しい工夫がなされている。

日本の春には何が咲くのかな？

「じゃあ、これからイラストを描きながら質問するから、みんな元気な声で答えてね」とミサコさん。

ボードに張った模造紙に、ペイントで大きな桜の花びらが次々に描かれてゆく。

「これ何かな、What's that?」

「桜」間をおかず子どもたちの手が上がる。

「OK, cherry blossoms, ハイ、じゃあこの単語を発音できる人」

元気な声と共に、先を競うように勢い良く手が上がる。

「なかなか反応してくれないのでは」と心配していたことがおかしなくらいの盛り上がりだ。

「Good! よかったです」と、手と手を頭上で合わせハイ・ファイブ! スポーツ選手もよくやる、喜びを分かち合う仕草を取り入れて、一層授業は盛り上がる。

春になり野山に桜が咲くと、花の下でお花見をするのは、日本独特の文化。これを英語で説明すると――

「We love watching cherry blossoms in spring. 私たちは、春には桜の花を見て楽しめます。じゃあ、この文章をみんなの前で発音できる人?」

少し長いこんな文章にも気おくれすることなく挑戦する子どもたち。うーん、日本の子どもたちの元気もアメリカの子どもたちに負けてはいないようだ。

胸を張って日本の文化を世界へ

春の行事から始まった英語の授業は、夏のお月見、秋のお月見、冬のお正月と続いて行く。どの行事もミサコさんの躍動的なイラストとともに、楽しく英語が紹介され、子どもたちも釘付け。

「アメリカで一番最初に覚えた英語はなんですか」の質問に「Nice to meet you! よろしく。やっばり挨拶は大切よね」とミサコさん。

楽しい40分の英語の授業は、あっという間に過ぎていった。

ミサコさんは、最後に子どもたちにこう語りかけた。「アメリカの子どもたちは今、「東日本震災」で被災した日本の子どもたちのことを、とても心配しています。そして折り鶴を折ったり、応援イベントを開いたり、いつでもサポートしたいという気持ちでいるんだよ。日本の文化は世界中で尊敬されています。その誇りある文化を世界に伝えられる人になって下さい。」

また、小島校長は次のように語っていた。「子どもたちの表情と様子を見ていて、絵を見る楽しさと、英語に対して心を開くことができたと感じました。」

* 写真/西場 誠志